

R. Browning : *Pippa Passes* に於ける innocence

野口忠男

- I はじめに
- II *Pippa* に於ける innocence
 - (a) *Pippa* の現実の姿
 - (b) *Pippa* と自然
 - (c) *Pippa* と人間
 - (d) *Pippa* と神
- III 四つの愛の虚像
- IV *Pippa* の innocence の意義
- V おわりに

I はじめに

Pippa Passes, A Drama に於ける *Pippa* について、E. D. H. Johnson は *The Alien Vision of Victorian Poetry* の中で、「彼女は、楽天的な性質と無心と直観力を賦与された、学のない無垢で純粋な自然児である。」
“She is a child of nature, unlettered, inexperienced, guileless, endowed only with a happy disposition, innocence, and the wisdom of her intuition.”⁽¹⁾と巧みに要約し、Park Honan はさらに簡潔に、「彼女の精神の自由な無垢性」“the free innocence of her spirit”⁽²⁾と述べている。これらの説明から理解されるように、*Pippa* は innocence を豊かに備えた人物として描き出されているため、*Pippa Passes* は、Browning に於ける innocence の問題を取り扱う上で格好な作品と思われる。

この作品は、Browning がイタリアから帰国後の1841年4月、詩人29歳

の時に、*Sordello* (1840) 創作中の副産物として生まれたものである。Browning は処女作 *Pauline* (1833) 以来 *Paracelsus* (1835), *Sordello* に於いて、ロマン主義の精神を引く深い内省と強力な自意識⁽³⁾の中で、知と愛の内面劇を探求し、主観的で自己愛の強い人間像を模索し続けて来た。Roy E. Gridley は、詩人の強力な自意識について次のように述べているほどである。「この作家はかつて私が見たいかなる正常な人間よりも、強力で病的な自意識に取り付かれているように思える」。“the writer seems to me possessed with a more intense and morbid self-consciousness than I ever know in any sane human being.”⁽⁴⁾孤独で自意識の強い *Sordello* から孤独ではあるが自意識のみられない Pippa の神の愛に生きる無垢な本性の発見は、Browning の詩精神の発展途上に於いて注目に価する偉大な進展と言える。

Pippa は純粹無垢な存在で、彼女が接触するあらゆる人々の内的な危機的生涯に強力な影響を及ぼす姿で描かれている。それでは彼女の innocence 性の発露の核心とその働きは、いかなる仕組みになっているのであろうか。Browning が1863年に Milsand への献辞の中で述べている言葉がある。「私が重点を置いたのは魂の発展途上に於けるさまざまな出来事である。その他のことはほとんど研究に値しない。」“My stress lay on the incidents in the development of a soul : little is worth study.”⁽⁵⁾これがそのまま Pippa についても当てはまるように思われる。私達は孤独な Pippa が、困難な状況のもとで自然や人間や神と純粋な関係を結ぶことによって、より高い純粹無垢性を志向していることがわかるからである。そこで Pippa の魂の発展をなす出来事を外界との関係に於いて捉えることによって、彼女の innocence の実体とその働きについて考えてみたい。

II Pippa に於ける innocence

(a) Pippa の現実の姿

Orr 夫人は、*Sordello* 創作中に *Pippa Passes* の着想が Browning に浮かんだ経過を次のように伝えている。

Mr. Browning was walking alone in a wood near Dulwich,

when the image flashed upon him of some one walking thus alone through life ; one apparently too odscure to leave a trace of his or her passage, yet exercising a lasting though unconscious influence at every step of it ; and the image shaped itself into the little silk-winder of Asolo, Felippa, or Pippa.⁽⁶⁾

ブラウニングが一人ダルウィチ近郊の森を歩いていた時、ただ独りで人生を歩いて行く人の姿、あまりにも世に知られないために、自分の足跡を残すことはないけれども、その歩む一歩一歩が無意識のうちに永久の影響を与える人の姿が彼の脳裡に閃くのであった。そしてこのイメージをアソロの糸繰り乙女フェリッパ即ちピパに表現したのであった。

私達は Browning の Pippa 創造の意図を感知することが出来る。詩人は彼女を両親をなくし身寄のない孤独な存在であり、無意識のうちに周囲の人々に永久的な影響を与える糸繰り乙女の姿で描写している。Browning に於ける Pippa の孤独で清純なイメージは、16歳で死んだ Evelyn Hope や *The Ring and the Book* の17歳のヒロイン Pompilia — 彼女は純情可憐で真実を愛し、神を信じすべての人の悪を許す聖女の如き女性である — を思わせるものがある。留意しておきたいことは、Browning にとって純粋無垢なる存在は、Blake のように田園に遊ぶ幼子ではなく、Wordsworth のような童心に映える光り輝く無垢な自然でもなく、清純な乙女のイメージがヴィクトリア朝の都会社会の中で重要な意味を担っているのである。

Pippa の住んでいる世界は、極悪非道と言える悪に満ちた社会である。E. D. H. Johnson は、墮落した世界について述べている。「ピパの住んでいる世界は、教会や国家の圧制、腐敗した役人、妬みや悪意や無慈悲な残酷心、姦通や恐かつや殺人に当てられている。アソロの絹糸工場の少女を取り巻く社会は、正しい愛、愛国心、家族関係や芸術を軽視している。」“Pippa's world is given over to the tyranny of church and state, to corrupt officialdom, to envy and malice and wanton cruelty, to adultery and blackmail and murder. The society which environs the

girl from the silk mills of Asolo makes a mockery of lawful love, patriotism, the familial relationships, and art.”⁽⁷⁾Pippa は退廃的な Asolo の絹糸工場に働き、休日は一年に一回、一月一日に与えられるきりである。「去年の悲痛」“old-year’s sorrow” (Intro. l. 31), 「長い一年の苦しい労働」“the next twelvemonth’s toil” (Intro. l. 70), 「明日から丸一年、パンとミルクを得るために、絹糸繰りのピパとならなければならぬ。」“To-morrow I must be Pippa who winds silk, / The whole year round, to earn just bread and milk :” (Intro. ll. 107—8)。Browning の感情を極度に抑制したこれらの心的表現には、Blake の“The Chimney Sweeper”に見られるように、合理主義の勝利の名のもとに苛酷な労働に従事している悲惨で孤独な者の姿が強く感じられる。Elizabeth Barrett Browning は、“The Cry of the Children” (1843) の中で、炭坑や工場で過激な労働に従事している子供達の苦悩や絶望の嘆き悲しむ姿を歌い、「正しく柔和な神」“Him good and mild” の愛も救いも得られない狂える国を嘆いている。

“For all day the wheels are droning, turning ;
 Their wind comes in our faces,
 Till our hearts turn, our heads with pulses burning,
 And the walls turn in their places.
 Turns the sky in the high window, blank and reeling,
 Turns the long light that drops adown the wall,
 Turn the black flies that crawl along the ceiling ;
 All are turning, all the day — and we with all.
 And all day the iron wheels are droning,
 And sometimes we could pray,
 ‘O ye wheels’ (breaking out in a mad moaning),
 ‘Stop! be silent for today!’⁽⁸⁾

“But, no!” say the children, weeping faster,
 “He is speechless as a stone ;
 And they tell us, of His image is the master

Who commands us to work on.
Go to !” Say the children — “up in Heaven,
Dark, wheel-like, turning clouds are all we find.
Do not mock us ; grief has made us unbelieving :
We look up for God, but tears have made us blind.”
Do you hear the children weeping and disproving,
O my brothers, what ye preach?
For God’s possible is taught by his world’s loving,
And the children doubt of each.⁽⁹⁾

私達は苛酷な労働に従事している Pippa の生活実感から彼女の孤独や不安を感じ取ることが出来た。しかしながら Pippa は、E. B. Browning に見られる光明のない懷疑と絶望に陥ることはない。Pippa の内には、現実の悲惨な状況を乗り越えて真実の自己を発見し、より良く生きようと努める進取的で楽観的態度が見うけられる。Pippa は孤独で悲惨な現実の中で、「明日を生きる十分な力」“Sufficient strength” (Intro. l. 34) をいかにして獲得して行ったのであろうか。それを順次みて行くことにしたい。

(b) Pippa と自然

本詩の巻頭に描かれた象徴的な初日の出の力強い描写を取り上げてみたい。Pippa が「大きな、粗末な、風通しのよい一室」“A large mean airy chamber” の寝台から跳ね起きてまず目にするのがこの強烈な朝日である。

Day!
Faster and more fast,
O'er night's brim, day boils at last :
Boils, pure gold, o'er the cloud-cup's brim
Where spurting and suppressed it lay,
For not a forth-flake touched the rim
Of yonder gap in the solid gray
Of the eastern cloud, an hour away;

But forth one wavelet, then another, curled,
Till the whole sunrise, not to be suppressed,
Rose, reddened, and its seething breast
Flickered in bounds, grew gold, then overflowed the world.⁽¹⁰⁾

東の空が燃えるように朱にそまり、雲間より流出する強烈な朝日は、Pippaにとって重大な意味がある。⁽¹¹⁾私達は、悲惨で孤独な状況にいる彼女が、溢れ出す清い陽光を全身全霊で受けとめ、神聖なるものの愛に深くあずかり、歓喜の時を満喫している姿を想像することが出来る。一般に太陽は、宇宙の偉大な創造者の象徴で、暗闇への光明であり、生きる喜びを与えてくれる生命の源泉をも暗示するものである。日の光が朝日となって流れ出る東の空の鮮烈なイメージは、このままで希望に満ち溢れた innocence そのままの世界を現出させている。朝日は Pippa に大自然の純粹で偉大な賜を与え、彼女はこれに浴することによって、今日の日を最も幸福に生き、明日を生きる新たな力を得ることが出来るのである。

Whereas, if thou prove gentle, I shall borrow
Sufficient strength of thee for new-year's sorrow.
.....
Thou are my single day, God lends to leaven
What were all earth else, with a feel of heaven, —
Sole light that helps me through the year, thy sun's!⁽¹²⁾

次に Pippa が、朝日を受けて真紅に燃える姫百合の美しさに驚嘆している場面を考えてみたい。

Oh, is it surely blown, my martagon?
New-blown and ruddy as St. Agnes' nipple,
Plump as the flesh-bunch on some Turk bird's poll!
Be sure if corals, branching 'neath the ripple
Of ocean, bud there, — fairies watch unroll

Such turban-flowers; I say, such lamps disperse
Thick red flame through that dusk green universe!
I am queen of thee, floweret!
And each fleshy blossom
Preserve I not — (safer
Than leaves that embower it,
Or shells that embosom)
— From weevil and chafer?
Laugh through my pane then ; solicit the bee ;
Gibe him, be sure ; and, in midst of thy glee,
Love thy queen, worship me!⁽¹³⁾

この真紅の姫百合は、美しい殉教者「聖アグネスの乳首」“St. Agnes’ nipple”とか「七面鳥の鶏冠」“Turk bird’s poll”の色鮮やかで官能的なイメージで描写されている。花の火焰を海底の「暗い緑の世界」“that dusk green universe”へ投げ与える表現は、現世の闇の世界と孤独な Pippa の心の奥に喜びの生命の焰を点すことを暗示しているように思われる。彼女は自分を花と同一化し、さらに姫百合の女王と名乗り、無上の喜びに参加しようとする。外の世界には、Blake の “The Sick Rose” のように、「ゾウムシ」“weevil”や「こがね虫」“chafer”や「みつばち」“bee”で象徴される破壊的な悪なる存在がはびこり、清く美しい花や純粹無垢な Pippa を蝕ぼうとしている。彼女には、これら外界にはびこる諸悪から、花を保護する方法がまったくわからない。清く美しい花は、ただ家という安全な場所にかくまうことによつてのみ花の真実の美しさを保つことが出来るだけである。このことは、花や Pippa の純粹無垢性が、外なる世界の破壊的な悪の力に脅かされ苦悩している姿と解することが出来る。この悲惨な状況に於ける彼女の願ひは、花から愛され崇拜されることによつて、朝日の時と同じように、純粹な美しさに触れ、心を喜びで満ち明日を生きる十分な力を得ることなのである。姫百合のイメージは、清純な小娘 Phene の描写に用いられ、さらに本詩の終りで Pippa に慰めを与えてくれる花として再度言及されている。

私達は、Pippa が孤独と不安な状態の中で、朝日と姫百合から躍動する

自然の生命と歓喜を感じ取る彼女の素直な心の目に、澄み切った清純さを見ることが出来るとともに、俗悪な世界で脅かされている自然や Pippa の純粹無垢性の危機を認めない訳にはいかないのである。Pippa の自然への賛美は、小さな動物へも及び、彼女の愛情の深さを物語るものである。上田敏の訳詩で知られる「春の歌」や本詩の結末に近いところに見られる次の詩句に表現されている。

Oh lark, be day's apostle
 To mavis, merle and throstle,
 Bid them their betters jostle
 From day and its delights!
 But at night, brother howlet, over the woods,
 Toll the world to thy chantry ;
 Sing to the bats' sleek sisterhoods
 Full complines with gallantry :
 Then, owls and bats,
 Cowls and twats,
 Monks and nuns, in a cloister's moods,
 Adjourn to the oak-stump pantry!⁽¹⁴⁾

Pippa は、昼の世界を司る鳥「ヒバリ」「lark」、*「ウタツグミ」*“mavis”, “throstle”, *「クロウタドリ」*“merle”, 夜の世界を司り官能性を暗示する「フクロウ」“howlet”, *「コウモリ」*“bat” に一日の経過を語らせている。彼女は小鳥や獣の持つ自然の生のリズムを本能的に正しく感じ取っている自然児なのである。伝記的にみても、Browning は幼少年時代から動植物に対して並並ならぬ深い愛を抱いていたのである。⁽¹⁵⁾ 以上のことから Pippa と自然について言えることは、彼女は太陽で代表される大自然と姫百合や小鳥で代表される小自然の生命と歓喜を魂の奥から感得しながら生きていると言うことが出来る。

(c) Pippa と人間

Pippa と人間との関わりとして、昼時彫刻家 Jules と結婚式をあげる清純な小娘 Phene を取り上げてみたい。Phene の美しさと幸福を羨望する

気持の中に、Pippa の人間への純粋な感情がありありと表現されている。

I wonder she contrives those lids no dresses!
— So strict was she, the veil
Should cover close her pale
Pure cheeks — a bride to look at and scarce touch,
Scarce touch, remember, Jules! For are not such
Used to be tended, flower-like, every feature,
As if one's breath would fray the lily of a creature?
A soft and easy life these ladies lead :
Whiteness in us were wonderful indeed.
Oh, save that brow its virgin dimness,
Keep that foot its lady primness,
Let those ankles never swerve
From their exquisite reserve,
Yet have to trip along the streets like me,
All but naked to the knee!
How will she ever grant her Jules a bliss
So startling as her real first infant kiss?
Oh, no — not envy, this!⁽¹⁶⁾

清く美しい Phene の処女性への賛美と嫉妬、処女性を汚されることへの恐怖と処女性を保持することのむずかしさが強く意識されている。Pippa の人間愛への強い関心は、彼女が空想する四つの理想的な愛の中に現れている。

Pippa は、この日を最も幸福に過ごすために、Asolo に住む四組の理想と思える愛を順次取り上げて空想にふける。彼女の不幸な身の上を考えると、彼女が空想の世界で理想愛を思い描くことは自然な人間感情であると言える。*Pauline* に於いては、空想を軽視していた Browning が、ここでは空想を積極的に取り扱っている。詩人は、無垢な Pippa が豊かな空想の世界に遊ぶとき、彼女のナイーブな聖なる本性が現れることを期待していたのではないかと思われる。

朝の場面は、家庭教師 Sebald と年若く美しい人妻 Ottima との情愛である。昼の場面は、仲間の芸術家達の悪巧みに嵌った清い心の彫刻家 Jules と清く美しい小娘 Phene との結婚による夫婦愛、夕方は、暴君フランシス王の刺殺を企てる弱気で優柔不断な若者 Luigi と彼を説得して断念させようとする母親との親子愛、夜は、罪深い兄の残した財産に目のくらむ高僧の宗教的な愛を取り上げている。各々の場面には、各人の人生を大きく決定する実存的で危機的な時が訪れ、この時 Pippa が、これらの人々の傍を逐次歌って通り過ぎて行くのである。Pippa はこれら四組の愛を一つ一つ理想的なものとして描き、それぞれの愛の主人公になった気持を抱くのである。彼女は空想の中で情愛も夫婦愛も親子の愛も決して永久不変の絶対的真實の愛でないことを悟って行く。

Lovers grow cold, men learn to hate their wives,
And only parents' love can last our lives.⁽¹⁷⁾

Pippa の空想の世界に於ける愛の品定め意義は、孤独で不安な世界に生きている彼女の愛の世界への参加であり、真の愛の価値の探求発見であり、つまるところ彼女の魂を最も高く浄化し、愛と真實の偉大な力を感じることに願うこととも言える。Pippa の空想に反して、現実に行われている愛の姿は、多彩で複雑な闇の様相を呈した虚像の愛である。Pippa の innocence 性が、虚像の愛に生きる人々に与える神聖な倫理的力については後で述べることにしたい。

(d) Pippa と神

Pippa が最後に到達した愛は、神の愛であり最高の真實の愛である。

……, best love of all
Is God's ; ……⁽¹⁸⁾

愛の究極は神の愛であることを悟った彼女は、今神の愛に関与している充実感を強く感じ、彼女の基本的な考えを形成している新年の賛歌を歌によって表現するのである。

All service ranks the same with God :
If now, as formerly he trod
Paradise, his presence fills
Our earth, each only as God wills
Can work — God's puppets, best and worst,
Are we ; there is no last nor first.

Say not “a small event!” Why “small”?
Costs it more pain that this, ye call
A “great event,” should come to pass,
Than that? Untwine me from the mass
Of deeds which make up life, one deed
Power shall fall short in or exceed!⁽¹⁹⁾

神の眼から見れば、地上の私達は神の創造物であり上下貴賤の区別は一切なく、皆同じ「あやつり人形」“puppets”のような存在である。その為、人の行ないには、小さい行いと大きい行いとかはなく、私達は神の経綸のもとで神の働く意志をただ実行していただくだけである。自分の幸福はかえりみないで、今日一日を精一杯過ごせば、他の四組の人々に負けない程の神の愛を受けて、人の役に立てるかも知れないと思ひ当る。これは神の愛との交わりに於いて、純粋な Pippa の魂の奥底から自然と溢れ出て来た真実なる喜びの叫び声と解したいものである。Pippa の魂と神の愛とが交わることによって、神を中核とした無垢な魂が形成されたと言える。私達は、この神を中核とした無垢な魂を神 innocence と呼ぶことが出来る。

しかしながら、Pippa の神 innocence は、清く善なるものであるけれども、*Saul* や *Abt Vogler* に於ける神との神秘的交流の強烈な体験とはかなり異なるものであることを注意しておきたい。

………… — my Shield and my Sword
In that act where my soul was thy servant, thy word was
my word, —

に赤い光線」“this blood-red beam” (Morning l. 5) と描かれている。Pippa に当る鮮烈な朝日とは異なり, Luca の流血を思い起させるイメージで書かれている。さらに次の描写には, 官能に酔いしれた者の心に映る気だるいうつろな朝の太陽が見られる。

Morning?

It seems to me a night with a sun added.
Where's dew, where's freshness.”⁽²²⁾

次に私達は, 夏の日の熱烈な愛の交感の場面に於ける自然をみてみたい。恐怖に戦く Sebald に対して Ottima は夏の日の思い出を語り, 官能の歓びの中へ彼を再度引き入れようとする場面である。

Ottima. Buried in woods we lay, you recollect ;
Swift ran the searching tempest overhead ;
And ever and anon some bright white shaft
Burned thro' the pine-tree roof, here burned and there,
As if God's messenger thro' the close wood screen
Plunged and replunged his weapon at a venture,
Feeling for guilty thee and me : then broke
The thunder like a whole sea overhead —⁽²³⁾

A Midsummer-Night's Dream の森をさまよう恋人達や *Lady Chatterley's Lover* の森での Constance Chatterley と森番との愛と血の交感の世界とは異なり, リア王の嵐の場面を想起させる迫力で描かれている。荒れ狂う自然の叫び声の中に恋人たちは, 激しい感情のほとばしりとともに神の怒りの声を聞いているように思える。彼らにとっての自然は, 純粹な Pippa とは異なり怒れる猛威の存在に化しているのである。

Sebald と Ottima との心の葛藤の過程には, (1)ドイツから来た貧乏なへば音楽家 Sebald が, Ottima の家庭教師として Luca の家へ出入りする原因があり, (2) Ottima と Sebald の恋愛関係の深まりと Luca の殺害という展開があり, (3) Ottima と Sebald との肉欲の喜びと Luca 殺害によ

る良心の呵責というアンビバレンスな魂の飽和状態である頂点に来て、(4) Pippa の歌で、二人とも良心の呵責に堪え切れず、自殺に走る結果が来る。この原因—展開—頂点—結果と発展する劇構成をなし、他の三つの話も内容こそ異なるけれども同様の方法を取っている。Browning の描き出すこれらの人物は、魂の自由をうばわれている愛の虚像の時があっても、必ず心の奥には純粋な魂を宿していて、神の愛に触れることによって覚醒し、改悛の見込みのない程凶悪な人間ではないのである。

IV Pippa の innocence の意義

純粋無垢な Pippa の魂から流露する歌が、現実の虚像の愛の世界で、危機的実存的状況に瀕する人々に与える愛の感化と innocence の意味を考えてみたい。

Ottima と Sebalt の精神的な危機の瞬間に、Pippa の歌が家の中へ流れ込んで来る。

The year's at the spring
And day's at the morn ;
Morning's at seven ;
The hill-side's dew-pearled ;
The lark's on the wing ;
The snail's on the thorn ;
God's in his heaven —
All's right with the world.⁽²⁴⁾

清純な Pippa の魂から流れ出たこの歌には、さわやかな春の朝、青草の丘に清く光る露、喜びさえざる雲雀、生命力溢れる蝸牛が、愛の神のもとに一つに調和統一され、この世界は神の光が輝いている清新、歓喜、生命の横溢する innocence そのままの聖域なのである。Pippa の歌について William Irvine and Park Honan は、次のように述べている。「年若いピパが、主観的な詩の歌い手、神の正しさを直接効果的に奏でる楽器として、純粋で自然で自意識が見られないのはまことに似つかわしいこ

とである。」“the child Pippa…would very properly be simple, spontaneous, unself-conscious, as a singer of subjective poetry, the direct and efficacious instrument of God’s goodness.”⁽²⁵⁾彼女の歌には、神の世界から流れて来る神秘的で靈妙な音楽があるように感じられる。彼女のこの歌は、愛欲に溺れ殺人劇に苦しむ二人の良心の核心に流れ込んで行く。ここには音楽のもつ不思議な力があると想定することが出来る。ブルーノ・ヴァルターの「音楽の道徳的ちからについて」からの次の引用はこのことを物語っていると言える。

……………音楽は、純粹に音楽として人を魅了し、^{たの}娛しませ、歡喜させ、また心を豊かにすると同時に、聴衆に対してあきらかに一種の倫理的呼びかけをしたのだ、……………「諸君のなかにある陳腐なもの、悪しきものは忘却の淵^{かほ}に沈み去れ、そして、諸君の最上にして至純なる温かい感情よ、目覚め来れ！」……………⁽²⁶⁾

音楽の靈妙な倫理的力に呼びかけられて、Sebald は自分たちの犯した罪を認識し、一瞬のうちに恋心は醒め本来の魂に目覚めて行く。続いて Ottima も良心に目覚め、二人は共に死をもって、情欲と殺害の苦しい罪を洗い浄めようと決心するのである。

閉ざされた俗なる世界で愛欲に苦しむものの魂を覚醒させた Pippa の純粹な歌には、神の偉大な愛が内在しており、それが無意識のうちに悩める人々の魂に強く働きかけていることを認めることが出来る。この Pippa の愛の行為には、黒い大蛇の悪霊に取り付かれ死に直面しているサウル王の生命を甦生させたダビデの直接的な働きかけ、または *The Ring and the Book* に於ける Pompilia のように極悪非道な夫 Guido 伯に苦しめられながらも、聖母のごとき真実の愛を捧げ通して死んで行った彼女のなまなましい愛の葛藤につながるものと解することが出来る。M. Arnold が *The Scholar-Gipsy* の中で、学生ジプシーを彼らの苦悩と熱病の俗なる世界へ引きずり込んだら、彼は狂気となり不幸となり悦びは失せ、希望はくじけ、力はゆらぐと歌っている。

Who fluctuate idly without term or scope,

Of whom each strives, nor knows for what he strives,
And each half lives a hundred different lives ;
Who wait like thee, but not, like thee, in hope.⁽²⁷⁾

But fly our paths, our feverish contact fly!

.....

Fade, and grow old at last, and die like ours.⁽²⁸⁾

Pippa と学生ジブシーを比較した場合、彼女は幻のごとき架空の存在ではなく、神を中核とした真実の愛に生きる純粋無垢なる存在である。その為彼女を取り巻く俗悪なる世界へ踏み込んで行っても、Pippa の *innocence* 性は、未熟で脆弱なものとはならないのである。彼女の神を中核とした *innocence* 性には、何者も侵し得ない純粋な無償の愛アガペーが流れているのである。人々に近づき、触れてささいな事で心を動かしたいと思う Pippa の願いに、このことは如実に示されていると言える。

Now, one thing I should like to really know :
How near I ever might approach all these
I only fancied being, this long day :
— Approach, I mean, so as to touch them, so
As to...in some way...move them — if you please,
Do good or evil to them some slight way.⁽²⁹⁾

VI おわりに

Pippa に於ける *innocence* とはいかなるものであったか再考してみたい。苛酷な労働の世界で、孤独で不安な Pippa は、太陽や姫百合の恩恵を受け、豊かな空想によって人間から愛を学び、神を中核とする清純な魂となり、そこから流露する清く美しい歌は、現実で苦悩する閉ざされた魂の人間を、無垢の本性に立ち返らせることができた。詩人は Pippa を合理的な精神風土の中で常に不安な危機的状況に脅かされている都会の人々の中へ取り入れたのである。Blake の田園的な *innocence* や Wordsworth

の自然へ回帰する innocence と異なるものである。詩人 Browning は、都会社会のいかなる危機的状況に於いても打ち碎かれることのない、神の愛と力に支えられた強力な純粹無垢な魂を創造したのである。Browning に於ける長い苦悩は、愛と真実の神⁽³⁰⁾の探求であり、発見であり決して神は死んではいけないのである。神は彼女の清い魂に答えてくれている。一日が終え今彼女は朝の賛美歌の真実なることを信じて、神に感謝しながら床に就く。

God bless me! I can pray no more to-night.

No doubt, some way or other, hymns say right.⁽³¹⁾

私達は、彼女の無心な魂から湧き出る歌に、明日を生きる喜びと生命を感じさせられるのである。

[註]

- (1) E. D. H. Johnson, *The Alien Vision of Victorian Poetry*, (Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1952), p.87.
- (2) Park Honan, *Browning's Characters*, (Archon Books, 1969), p.83.
- (3) R. Browning, *Pauline* ll.268—80.強力な自意識が表現されている。

I am made up of an intensest life,
Of a most clear idea of consciousness
Of self, distinct from all its qualities,
From all affections, passions, feelings, powers ;
And thus far it exists, if tracked, in all :
But linked, in me, to self-supremacy,
Existing as a centre to all things,
Most potent to create and rule and call
Upon all things to minister to it ;
And to a principle of restlessness
Which would be all, have, see, know, taste, feel, all —
This is myself ; and I should thus have been
Though gifted lower than the meanest soul.

- (4) Roy E. Gridley, *Browning*, (Routledge & Kegan Paul, London and Boston, 1972), p.20
- (5) William Clyde DeVane : *A Browning Handbook*, (Appleton-Century-Crofts, Inc., 1955), p.73.
- (6) Mrs. Sutherland Orr : *A Handbook to the Works of Robert Browning*, (Kraus Reprint Co., New York, 1969), p.55.
- (7) E. D. H. Johnson, *The Alien Vision of Victorian Poetry*, p.87.
- (8) Elizabeth Barrett Browning, "The Cry of the Children" ll. 77—88.
- (9) *Ibid.* ll. 126—36.
- (10) *Pippa Passes*, Intro. ll. 1—12.
- (11) 荻野昌利氏論文「窓の内と外」(1)「英語青年」1977年1月号。pp. 558—9。朝日についての有意義な指摘が見られる。
- (12) *Pippa Passes*, Intro. ll. 33—41.
- (13) *Ibid.*, ll. 88—103.
- (14) *Ibid.*, Night, ll. 1330—41.
- (15) Griffin and Minchin, *The Life of Robert Browning*, (Archon Books, Hamden, Connecticut, 1966), pp.39—40.
- (16) *Pippa Passes*, Intro. ll. 139—56.
- (17) *Ibid.*, ll. 163—4.
- (18) *Ibid.*, ll. 179—80.
- (19) *Ibid.*, ll. 190—201.
- (20) R. Browning, *Saul*, ll. 193—8.
- (21) *Ibid.*, "Abt Vogler" ll. 29—32.
- (22) *Pippa Passes*, Morning, ll. 32—3.
- (23) *Ibid.*, ll. 191—97.
- (24) *Ibid.*, ll. 221—8.
- (25) William Irvine and Park Honan, *The Book, The Ring, and The Poet*, (The Bodley Head, London, 1975), p. 95.
- (26) フィッシャー, 佐野利勝訳「音楽を愛する友へ」新潮文庫。96—97頁。
- (27) M. Arnold, *The Scholar-Gipsy* ll. 221—30.
- (28) *Ibid.* ll. 167—70.
- (29) *Pippa Passes*, Night. ll. 342—47.
- (30) *Pauline*, ll. 1020—1。詩句参照。

I believe in God and truth

R. Browning : *Pippa Passes* に於ける innocence

And love,

(3) *Pippa Passes*, Night, ll. 354—5 .